

生涯学習における一節切（ひとよぎり）尺八の楽しみ

「大学連携講座」の実践を通して

The Enjoyment of Playing the Hitoyogiri Shakuhachi as Lifelong Learning:

through a Collaboration Workshop between Nagoya Management
Junior College and Nagoya-City

加藤 いつみ Itsumi Kato

飯田 勝利 Katsutoshi Iida

目次

- I. はじめに
- II. 「大学連携講座」の内容
 - 1. 参加者の実態
 - 2. 講座内容
- III. 楽器製作
 - 1. 楽器のモデル
 - 2. 製作過程
 - 3. 使用したもの
 - 4. 製作にあたっての留意点
- IV. 一節切の吹き方
- V. 学習者の反応
- VI. まとめ

I. はじめに

筆者は、室町から江戸中期まで盛んに吹かれた“一節切尺八”に興味を覚え、3年程この笛に傾注している。一節切尺八は、真竹を素材とし、五つの指孔と一つの節を持ち、全長ほぼ33.6cm程から成る竹笛である。その起源は明確ではないが、文献上に残された最初の一節切尺八(以下一節切と略記)は、豊原統秋著の雅楽書『体源抄』(1512)の中にあり、そこでは五種類の一節切が図式化されている。これら歴史的な変遷については、「一節切尺八で吹かれた江戸初期の“はやり唄”」と題して2009年名古屋経営短期大学紀要に報告した。(注1)

最近、江戸文化の紹介される催しものをしばしば耳にする。その一つが一節切である。

2008年7月名古屋の八事山興正寺にて、大森宗勲(1570～1625)作の“鳳吹”が琴古流尺八奏者・飯田勝利によって披露され(注2) また9月には、諏訪の市民団体主催で行われた<お諏訪まつり>に諏訪の名刹貞松院が所蔵している“秋声”を使って尺八奏者・藤原道山が演奏をした。(注3)また、江戸文化に関する講演もしばしば開催されている。2009年には、「尾張名古屋のおもしろ文化史」という講演が開催された。そこでは19世紀初頭、名古屋に駱駝が来た様子を1冊の本にまとめた、名古屋の文筆家兼画家・高力種信(号猿猴庵 1756～1831)の話が紹介された。彼は、「絵本駱駝具誌」と題する本に駱駝を見ようとする人々の賑やかな様子、その人たちの髪型、着物、着付け、持ち物、など解説を交えてリアルに描いている。(注4)これらの絵から、江戸期の人たちには、我々の及びもつかない楽しみがあり、未知なるものに対する旺盛な好奇心をもって、日常生活をエンジョイしていた様子が見られた。このように江戸文化がそれぞれの領域でわかりやすく紹介されることにより、今日の我々は、祖先が築いた文化を親しみを込めて受け入れることができる。

そこで、筆者は、江戸文化に対する人びとの興味を、一節切の復元とその演奏に結び付けて考えた。触れれば音の出る楽器が簡単に入手出来る今日、この音の出にくい笛に興味を持つ人は本当にあるであろうか。どんな人が学習をするであろうかなど、その反応に関心を持った。ちょうどそんな折、「大学連携講座」の案内があり、そこでの開催を思い立った。(注5)

今回は、この笛に対して幾人参加し、製作・音出しを試みるのか、また受講者はどんなことを期待して参加したのかなど、この講座を通してわかってきた受講者の実態をまとめ、一節切が家庭楽器としての役割を果たすことの出来る可能性を探ってみた。

II. 「大学連携講座」の内容

1. 参加者の実態

連携講座は、2009年10月13日より11月17日まで、18:30～20:30、名古屋女性会館にて5回シリーズで開催された。定員は15名。しかし実際の受講者は10名であった。そのうち名古屋市内在住は5名、市外は5名であった。表1は参加者の年齢構成、表2は演奏できる楽器を挙げてもらったものである。調査当日1名の欠席があり、回収できたのは9名分である。

表1. 年齢構成

年齢	男性	女性
40歳代	1	1
50歳代	1	2
60歳代	1	2
70歳代	1	
合計	4	5

表2. 音楽的バックグラウンド

性	演奏可能楽器	人数	種類
男性	無	3	
	有	1	オカリナ(1)
女性	無	1	
	有	4	ピアノ(3) オカリナ(2) 声楽(2) ケーナ(1) ウクレレ(1)

女性は、40歳代～60歳代まであり、男性は40歳代～70歳代と幅があった。また、演奏できる楽器については、女性のほとんどは何か楽器が演奏できる。男女ともに、オカリナ、ケーナと言った吹奏楽器のできる人が参加していた。このことは、楽器を吹けることが、一節切への親近感に結び付いたのであろうか。また、受講者は、一節切尺八を知って参加したのであろうか。表3は、一節切尺八を知っていたか、否かについて尋ねたものである。

表3．一節切尺八を知っていたか

性	知っていたか否か	人数	
男性	知らない	3	
	知っていた	1	以前に講座で製作した事がある
女性	知らない	2	
	知っていた	3	名前だけは聞いていた(2)

学習を始める前に、楽器を知っていた人は4名、知らない人は5名あった。筆者らは、以前に一節切製作の一日ワークショップを行った。その折に参加した人と筆者のオカリナ関係の友人はこの名前を知っていたが、一般の人たちは初めて耳にするようであった。

2. 講座内容

次に、筆者らが実施した講座とその内容について述べてみよう。

講座は5回行われ、そのうちガイダンスと一節切の概説、楽器の生演奏は加藤いつみが行い、楽器製作と音出しの指導は飯田勝利が担当した。楽器製作には、10月13日と20日の2回をかけた。3回目から出来た笛を使って、音を出す練習を試みた。4回目から、フ・ホ・ウ・エ・ヤ・リ・ヒの音階練習に入り、続いて11月10日には、〈ほたるこい〉に挑戦した。そして5回目は、江戸時代に歌われていた〈よしのの山〉を皆で歌ったり、吹ける人は一緒に吹いてもらった。5回に亘って実施した指導内容は、表4のようである。

表4．指導内容

回数	日程	内容
1	10月13日	ガイダンス、一節切尺八とは？ 楽器演奏の生演奏を聴こう。 一節切尺八を作ろう
2	10月20日	一節切尺八を作ろう
3	10月27日	音出し、吹こう！ フ(ら)ホ(し)ウ(れ)エ(み)ヤ(そ)リ(ら)ヒ(し) の音階練習 〈ほたるこい〉を吹こう！
4	11月10日	〈ほたるこい〉を吹こう！ 〈よしのの山〉を歌おう
5	11月17日	〈ほたるこい〉を吹こう！ 〈よしのの山〉を歌おう

III．楽器製作

1．楽器のモデル

楽器製作の指導は飯田勝利が担当した。飯田は、筆者らが2008年に調査した14本の一節切の中で、鳴りやすかった法蔵寺の“まむち”(安土桃山)と興正寺の“無銘管”(江戸初期)の2本のサイズを選んだ。それらは、いずれも長さ33.8cmであった。(注6)そこで、この管長で、指孔位も近似したモデルになる笛を探したところ明暗真法流尺八奏者・相良保之が所蔵する大森宗勲作の“凝雲”を見出すことが出来た。今回の製作にあたっては、“凝雲”の管長、指孔位をモデルにした。(注7)以下、採寸図を示す。

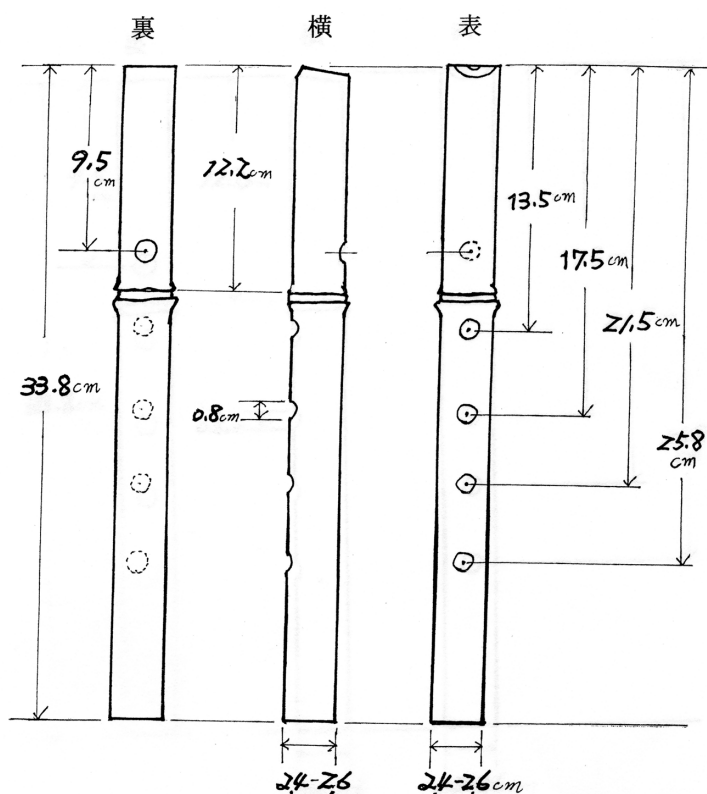


図1.“凝雲”採寸図

2．製作過程

製作過程は以下のようなものである。

竹を求めて一節切管材を準備する

- ・町の竹屋、またはホームセンターで外径約24～27mmの真竹(マダケ) 或いは虎竹(トラチク)を求める。一本の竹から何本も作れるよう、節間40cm位のものを選ぶ。
- ・節の形状をよく見極め、天地(根側と尖端側)を決める。

- ・節を境に根側へほぼ 15cm、尖端側へほぼ 25cm の採寸をして、両端に養生テープを巻き、採寸位で切断し一節切管材とする。

油抜き

- ・簡易法として、竹全体をクルクル回しながらガスコンロの炎を均等に当て、油抜きをする。表面に油成分が滲み出したら、付着している汚れなどと一緒に布切れで取り除く。

節抜き

- ・木工用ドリルビット 15mm を使い、節を抜き、金ブラシで内面を仕上げる。

切る

- ・バリ（ささくれ）防止のため、節から地側へ約 10cm、天側へ 20cm 辺りに養生テープを巻く。
- ・節から地側 12.2cm に厚紙定規を巻き付け、竹円周に線引きをする。
- ・竹筒を左手で握り、反対方向に回しながらその線引きに従ってノコギリを挽く。
- ・一節切採寸器にあてがい、管尻位置をマークし、上記同様に線引きをして切断する。

指孔開け

- ・再び、一節切採寸器にあてがい、竹縦方向に溝がある場合、地側（歌口）の溝は表面に、天側（管尻）の溝は裏側とする。
- ・地側（歌口）から天側（管尻）に向かって管の中心、左右満足出来るよう線を引く。
- ・ゴムリング（赤マーカー 2 個付き）を両端から 5cm の位置に一個ずつ詰め、赤マーカーを上記の線に合わせる。続いて反対側の赤マーカーに合わせて、裏側にも線を引く。これにより、表裏の指孔が対称位となる。
- ・次に表の指孔四つ、裏の指孔一つの位置を採寸器に小定規を渡して、マークする。
- ・各交点に千枚通し或いはアイスピックで小さな傷穴を作る。
- ・竹の中に貫通防止割竹を挿入し、8mm ドリルビットを填めた電動ドリルを垂直に固定して、ビットの先端を小さな傷穴に当て、順に 5 つの指孔を開ける。

歌口を削る

- ・顎当りは歌口頂点より 2mm 低くなるよう勾配を付ける。
- ・小刀かヤスリを使って歌口のスロープ長さ 6mm、切れ込み 1mm となるよう整える。この出来具合で一節切独特の繊細な音色が決まる。

磨いて仕上げる

- ・サンドペーパー #180、#400、#800（番号が大きい程細かい）の順に歌口、管尻など仕上げる。
- ・指孔の周辺も軽くサンドペーパー #800 を当てる。

このような製作過程を経て、参加者全員が自分の一節切を作ることができた。

次に使用した材料・工具等について述べてみよう。

3. 使用したもの

虎竹（トラチク）	24 ~ 27mm 400mm
竹挽きノコギリ	
穴開けキリ	千枚通し、アイスピック
電動ドリル	
ドリルビット（キリ）	8mm、15mm（長さ 290mm）
ヤスリ	丸平鉄工用
サンドペーパー	#180 #400 #800
その他	厚紙定規、プラスチック定規（30cm・15cm）、金ブラシ、養生テープ、サインペン、貫通防止割竹、一節切採寸器（図2 飯田考案）、ゴムリング（図3 飯田考案）

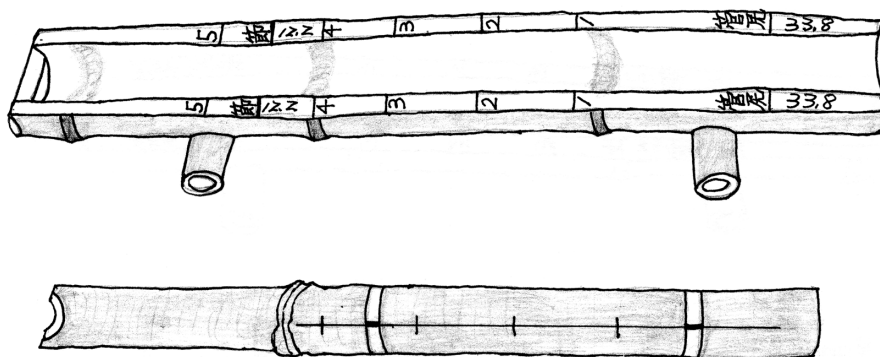


図2：(上)一節切採寸器，(下)採寸器に入れて寸法を記した一節切



図3：ゴムリング

このゴムリングを使うことにより、表裏の指孔が対称位となる。

4. 製作にあたっての留意点

次に、製作にあたって指導者が留意した点について述べてみよう。二日間の作業工程の中で上手いかなかった点、上手いかった点に分けて列記し、製作上の留意点としてまとめた。

上手いかなかった点

- ・竹の溝が節上正面になるところ、逆に節下を正面として指孔（1～4）を開けた人が2名あった。その結果、指孔を完全に閉じることができなかった。取りかかる前に、竹の天地についての確認をしっかりさせる。

- ・何人かは、指孔開けの時、ドリルを直角に保持できず、振れたため指孔が規定よりも大きくなった。作業に入る前に、ドリルを固定保持する練習を充分しておかなければならなかった。
- ・顎当たりは、歌口頂点より2mm程低くすべきところを、逆に歌口より顎当たりを高く作った人があった。最初に、歌口の形状と“音が出る”原理をよく説明しておかなければならなかった。

上手くいった点

- ・一節切竹材は、尺八のそれに比べて細く、また竹表皮もうすく、バリが発生しやすいので、ノコギリを当てる際、養生テープを巻いて防止した。その結果、切断面がきれいに仕上がった。
- ・竹断面が竹側面に対し直角になるよう、厚紙定規を巻いて円周線を描き、その線上をノコギリで切ってもらった。その結果、ほとんどの笛が逆立ち出来、受講生は満足気であった。
- ・指孔位採寸の簡便化と指孔の表裏が対称位となるよう特別に考案した一節切採寸器（図2）とゴムリング（図3）が作業効率の向上と形態・音程の均一化に役立った。
- ・ドリルで指孔を開ける時、管の裏側への貫通を防止するために割竹（15 400mm）を作り、管内へ挿入した。その結果、全員貫通を免れた。
- ・笛が出来上がってから、その正面に“亀”“穂秋”と銘を書き入れた受講生があった。趣があり効果的であった。

IV . 一節切の吹き方

先人が吹き方をどのように捉えていたか、残された資料は少ない。そこで筆者らは、一節切の衰退を嘆いて記した一節切奏者・村田宗清「第一 尺八吹きやうの事」(1669)に注目し、村田の記した吹き方を参考にした。(注8)以下、彼の吹き方について述べてみよう。

途中で息がなくなったり、ぐったりしないように吹くこと

心配事や心に思うことを捨てて、無心で吹くこと

湿っぽい、なよなよとした音や吹き方はよくない

と記し、さらに一節切系譜二世といわれる宗佐老翁の歌に触れて次のように述べている。

こだわりや迷いを捨てきれず、しなだれるような尺八はよくない

なよなよしたり、重々しくならず、軽やかに吹く尺八がよい

音の冴えが鈍らないよう心掛けよ。そのためには、安定した息を整えること

陽気に、すらすら軽やかに吹き、親しめる尺八となるよう

と、書き加えている。

また、時代は下って明治の国文学者で一節切愛好家・井上頼圀は、「息の吹き込みは、冬の

日、掌中に息を吹きかけ、僅かに温気を感じる程の力で吹くものである」と述べている。(注9)さらに、邦楽研究者で尺八奏者・藤田鈴朗は、「一節切は、尺八のようにビュービューと吹くのではなく、哀音切々たるものがあり、息は唇から軽く出し、織音を楽しむもの」と記している。(注10)つまり、三人の記述をまとめると、「雑念を捨てて吹くことに集中し、安定した優しい息で軽やかに、織音を楽しみながら吹くこと」ではなからうか。

これらの先人の体験を受けて、筆者らは次のようなことを心掛けて指導に当たった。

腹式呼吸の要領で、「息の道は、お腹の底から口まで繋がっている」とイメージする。

息を緩かに優しく、歌口に吹き掛け、「その向こうにあるローソクの炎をそっと消す」という感覚で吹く。

この指導の結果、本講座では、10名中9名が音を出すことができた。今回の受講生は、中高年者や女性が多く、上記の実績は相良保之が述べた「一節切は女性や子ども、お年寄りの方がよく鳴る」と似通った傾向が見られた。(注11)

実際の音出しは、まず、一節切のフ・ホ・ウ・エ・ヤ・リ・ヒの文字譜を使って、音階練習から始めた。譜1は、一節切の音階を五線譜と対比させたものである。続いて譜2の<ほたるこい>の練習に入った。

譜1．一節切譜の音階と五線譜の対比

フ ホ ウ エ ヤ リ

ら し れ み そ ら

Detailed description: A musical staff in treble clef with a common time signature. It shows a scale of six notes: F (ra), G (shi), A (re), B (mi), C (so), and D (ra). Each note is represented by a half note on a five-line staff.

譜2．ほたるこい

ウ ウ ウ ホ ホ ウ フ フ フ ウ ホ ホ ウ ウ ホ フ

れ れ れ ど ど れ ら ら ら れ ど ど れ れ ど ら

5

フ フ フ ウ ホ ホ ウ ウ ホ フ ウ ウ ウ ホ ホ ウ

ら ら ら れ ど ど れ れ ど ら れ れ れ ど ど れ

Detailed description: Two staves of musical notation in treble clef with a common time signature. The first staff contains the first four measures of the melody. The second staff starts with a measure number '5' and contains the next four measures. The melody consists of eighth and quarter notes with rests.

V．学習者の反応

製作過程において、学習者に難易の程度や気づいたことを尋ねたものである。

1．楽器製作において

製作面においては、分かりやすい説明で作りやすかった(4名)、道具の使い方が難し

かった（2名）、楽しかった（3名）という回答があった。男女ともに電気ドリルで指孔を開ける作業など、危険を伴う作業を大変であると感じた人があったが、おおむね楽器製作は楽しいものとして受け止めていたことが分かった。

2. 音出しにおいて

自分の出している音が正しいピッチの音なのか分からないという人も含めて、音を出すことに難しさを感じている人は6名あった。何とか出るようになった人は2名あり、そのうち1名は、ケーナが吹ける人、他の一名はオカリナやフルートの吹ける人である。このように吹奏楽器を学習している人は、口の形や息の使い方が似ている所から一節切の音もなんとか出すことが出来た。

3. 江戸時代の唄〈よしのの山〉について

「糸竹初心集」(1664)におさめられている“はやり唄”の中から〈よしのの山〉を五線化し、歌ってもらい、吹ける人にはその旋律を吹いてもらった。その結果、歌詞が楽しいと言う人が2名。大変興味が有り、その時代の演奏を聴いてみたいという人が2名。新鮮・懐かしく受け入れられたという人が2名あった。全体の感触として、江戸時代の唄に対して、抵抗なく受け入れている傾向が見られた。

VI. まとめ

以上、「大学連携講座」の参加者の音楽的なバックグラウンド、講座の内容、楽器製作、音出し、江戸期の“はやり唄”に対する感じ方、について述べてきた。受講者の多くは、一節切を珍しい楽器として受け止め、「楽しんで吹けるようになるまで練習したい」、「一曲披露できるくらいまで吹きたい」、「友人と合奏したい」、「機会があれば習いたい」などの興味を示していた。また、「この受講を契機として邦楽器への関心が高まった」、と答えていた人や「台所に置いて手がすいた時はいつも吹いている」と述べた女性もあった。

そこで、今回の課題である一節切の生涯学習への応用について筆者の考えを述べてみたい。この楽器は、わらべうたを吹くのに適していると考ええる。何故なら、わらべうたは、一節切の弱点 半音が出しにくい、音数が少ない、歌口が狭くピッチが定まりにくい、音量が弱い といった点を上手くカバーしている。つまり、わらべうたは、主に半音を含まない陽音階から成っているので、半音を出すという必要もないし、音数は、2～5音と少ないので、一節切での音域が足りないという問題も起こらない。また、わらべうたは、概してリズムがゆったりとしているので、一音一音のピッチを正確に出すゆとりもあるし、わらべうたにあわせて吹くのであれば、そんなに大きな音量は必要としない。以上、わらべうたと一節切の機能的な関係について述べた。それ以上に、一節切の竹の持つ素朴さやどこか郷愁を誘う音色は、わらべうたを吹く条件を備えているのではなかろうか。

今回製作した笛は、筒根音が“ら”(中央イ音)から始まる黄鐘管である。多くのわらべう

たは、その中心的な音は、“そ”(中央ト音)であり、その音を中心にして“ふぁ”(中央ヘ音)“れ”(中央二音)の音が使われている。そこで、黄鐘管の筒根音をわらべ歌の最低音とみなし吹けば、難しいことではない。つまり、尺八の筒根音をいかなる管でも“口”音と読むのと同じことである。しかし、黄鐘管では記譜上の音と実音の音高差がありすぎるために、この笛の音に合わせて歌いたいと思っても、ピッチが高すぎたり、低すぎて歌えない、ということが起こりうる。今回は、黄鐘管を製作したが、記譜上の音と実音が同じ高さである壱越管(長さ23.1cm、筒根音“二点れ”)の製作を試みれば、わらべうたが“歌えない”という問題は起こらないのではないか。

「一節切の製作と復元」を通して、生涯学習として相応しい一節切のあり方について述べてきた。この講座では練習教材として<ほたるこい>の導入を試みたが、受講者は、この3つの音から成るわらべうたを自然な形で受け止めていた。今回の講座を通して得られ体験を基に、壱越管と“わらべうた”をドッキングさせる、という新たな課題に向かって研究を深めたいと考える。

注1. 名古屋経営短期大学『紀要』第50号 2009年 P.95～109

注2. 八事山興正寺にて2008年7月25・26・27日の三日間演奏

注3.“秋声”は、信長が家康に贈った笛“乃可勢”を模して製作された笛で、その笛を使って高島城市民ステージにて2008年9月20日演奏

注4. 名古屋市博物館資料叢書3『猿猴庵の本』2007年3月31日発行

注5.「大学連携講座」は、市民の多様化、高度化する学習ニーズに応え、幅広い学習や系統的な学習機会を提供するため、大学・高等教育機関等と名古屋市生涯学習推進センターが連携し、2004年に始まった事業である。

注6. 法蔵寺(岡崎市本宿町)が所蔵している“まむち”と興正寺(名古屋市昭和区八事本町)が所有している2本の一節切のうちの1本である。

注7.「一節切の全て」邦楽ジャーナル Vol.234 P.32

注8.『洞簫曲・下巻』秋木屋板 1669年

注9. 中澤周簫「一節切の沿革に就いて 下」『都山流楽報』225号 1928年

注10. 藤田鈴朗「一節切の研究」『三曲』第185号1937年P.16、第193号 1938年 P.17

注11.「真法流と一節切」『邦楽ジャーナル』2007年 Vol.246 P.47

参考文献

名古屋市博物館資料叢書3『猿猴庵の本』2007年3月31日 発行

『洞簫曲』秋木屋板 1669年

中澤周簫「一節切の沿革について下」『都山流楽報』1928年

藤田鈴朗「一節切の研究」『三曲』第185号 1937年、第193号 1938年

「真法流と一節切」『邦楽ジャーナル』Vol.246 2007年